

# 深イ～話！

No.61

—宮崎中央新聞（香葉村真由美 「愛でしかかわらんとよ」より—

心を思うことの大切さを私はサッチちゃん（仮名）という子のおばあちゃんに教わりました。

サッチちゃんのご両親はおばあちゃんのところ、まだ小さなサッチちゃんを預けたままいなくなっていました。そのときからサッチちゃんは声を失いました。人前で一言も喋らなくなったのです。唯一喋ることができる相手はおばあちゃんでした。おばあちゃん以外の人には「うん」と頷くことと、「ううん」と首を振ること、それだけでコミュニケーションをとっていました。

6年生になった時、私はサッチちゃんの担任になりました。

彼女が6年間学校で一言も喋らずに卒業することが、私はどうしても嫌でした。それで、おばあちゃんのところに行って、サッチちゃんがどうして喋らなくなったのか、その理由をクラスの子どもたちに話していいか聞きました。

おばあちゃんは「ダメだ」と言いました。それは、サッチちゃんがずっといじめられていたからでした。

何も話をしないサッチちゃんは、「何を考えてるのかわからない」と周りの子たちから言われ、次第にいじめられるようになっていたのです。

サッチちゃんがいじめられると、その翌日には、必ずおばあちゃんは学校にやって来ました。小さい体でドタドタドタッとやって来て、教室の扉を開けると、「誰ね！うちのサチコをいじめたのは！」と言って、一生懸命サッチちゃんを守っていました。だから、おばあちゃんは、「サチコの両親のことをみんなに話したら、またいじめられてしまう」と言ったのです。

しかし、私は、「一言も話さないままサッチちゃんを卒業させることは私にはできません。お願いだから私を信じてください」と頭を下げました。何時間も話をして、「わかった。そこまで言うなら先生を信じる。その代わり絶対にサチコをいじめの子をつくらないで欲しい」と言われ、約束をしました。

次の日、クラスの子どもたちにサッチちゃんがなぜ声を出せないのか、理由を説明しました。子どもたちはその理由を初めて知って驚いていました。

「先生はサッチちゃんとお話がしたい。みんなもサッチちゃんと話をしてほしい。サッチちゃんに『声を出して』と言うんじゃなく、どうすればお話ができるか考えてほしい。それがクラスだから」と伝えました。

そこで子どもたちが考えたのはペンとメモ用紙でした。サッチちゃんがペンとメモ用紙を持ち歩き、言いたいことをメモして、相手に見せるのです。サッチちゃんに「それでいい？」と聞くと、サッチちゃんは笑顔で頷いてくれました。

翌日、サッチちゃんは「おはよう」とメモ用紙に書いて、それをある子の机に貼りました。すると、机に貼られた子はそのメモを見てサッチちゃんのところに行き、「サッチちゃん、おはよう！」と言いました。サッチちゃんは「すごい！」という顔をしました。

次の日は、「おはよう、宿題やってきた？」と書いたメモをサッチちゃんは机の上に貼りました。それを見た子が「サッチちゃん、おはよう！私、宿題やってきたよ」と答えました。

ある日、他のクラスの子からいじめられてサッチちゃんが泣いていると、「いじめたのは誰？何年何組か書いて」とクラスの子たちは聞きました。サッチちゃんが書いたメモを見てその教室に行き、「サッチちゃんをいじめたの誰？」と言って、サッチちゃんのおばあちゃんの代わりにクラスの子たちがやり始めたのです。

サッチちゃんのメモの言葉を通して、クラスの子どもたちの関係が深まっていくのが分かりました。